

## 我が人生の茨道

私は大正拾年五月、旧磐田郡田原村（合併して現在は磐田市）西島四四四、農家・鈴木勝吉の三男として此の世に生を享けました。両親が子供の将来を考えて呉れたのか、兄弟姉妹六人すべて、当時の高等学校を卒業させて下さいました。毎年春四月、田植が終ると養蚕を始め、生えたばかりの蚕の上に蚕網を張り、細く切った桑の葉をその上に振りまくのです。此の作業を三回程繰り返すと、蚕自体が三度脱皮し、繭まゆを作り始めます。之は大変と室の中を繭棚に改造します。

蚕が口から細い糸を出し段々姿が見えなくなって行くのを見て居ると愛しく思い、「頑張って！」と心に思うのでした。



（繭と蚕）

之から数日の後、繭棚から繭をはずし、業者に賣り渡すのでした。

春先に植えた稲も大きく成長しましたが、同時に雑草も大きくなりましたので、田の草取りと一番草取りの毎年続けるの作業と、心配事が多かったのか、人生之からと言う六十五歳に脳梗塞を患い、父上は帰らぬ人となりました。

私は此の時、農学校三年生になったばかりでした。毎月の学級費も父上からだったので、何も気にしていませんでしたが、父亡き後は兄貴の財政になったので、登校間際にお願ひすると怒鳴られるのが常でした。而し之は私が悪いのです。農家では日頃余り現金を扱っておらず、必要に応じて銀行や郵便局で降して来ますから。

この当時、普通の農家では手と足を使ってむしろ蓆を織って居りました。母が毎日織るのを見て、見様見真似で織っても見ようと思いましたが、縦系の縄がなければ蓆は織れません。縄をなうにもすく藁選りを掛け、泥を取り、尚且つ太い藁では蛇口は通らず、切り取らなければならず、一枚の蓆を織るにも其の前の支度が必要です。蓆とて一枚では業者が買いません。おかね錢の尊さが心に染みる思いでした。

此の時代は農家が農薬を使って居りませんので、小川や農業用水路にはどじょう鰌やうなぎ鰻、ふな鮒等、沢山居りました。モジリと言って竹で作った器具を使い、その中にたにし鰌の餌にとぬか田螺を潰し糠とまぜて親指位入れ、モジリ



（鰌）

三十個を背負籠に入れて、夕方農業用水路の鯰の居りそうな川床に、流されない様に伏せて、翌朝まだ夜明前、背負籠を背負い、モジリを引き揚げに行きます。

其の時、モジリの中でコチコチと音がすれば鯰が入って居て思わず笑顔。農学校在学中の時分でしたが良く行きました。

『柳の下にいつも鯰は居ない』の諺ではないが、場所を変えなければと、往復一キロメートルは有り、自分乍ら良くやってきたなあとと思います。

来年三月卒業と言う時、市の職員だったか記憶がないが、警察官にならぬかとか、別の人々が満州開拓民の仲間に入らぬかと、仲間になれば満州の広野二丁歩が無料で提供されるが、などと言われましたが、私は既に就職が決まって居りますからと断りました。運命のいたずらと言うのでしょうか、守護神の賜物と思って居ります。

春三月。中泉農学校（現磐田農業高等学校）を四十二回の卒業として社会に巣立ちました。そして、村の中の先輩を慕って、日本の食品会社が合併で作った台湾の合同鳳梨株式会社に入社しました。

家族に送られ台湾へと出発進行。我が人生の第一歩を踏み出しました。四月のある日、トランクと洋傘を持ち、西島のカドヤの前で袋井行のバスに乗り、終点で下り、東海道線名古屋行きの鈍行に乗車しました。名古屋に着いた頃、外は薄暗かったが、持ち物を確認して、通し切符なので其の儘<sup>まま</sup>タクシーで東船場に行き、台湾連絡船に乗りました。

大衆船室は何の仕切もなく、上敷きが通しで敷いてあるだけで、枕等何もなく、自分の持ち物を枕に利用する程度だったと記憶して居ります。歌ではないが、銅鑼の音に送られて、名古屋港を出港しました。瀬戸内海は静かで滑るような感じで、食事も百姓生まれには美味しかったが、お替わりはありませんでした。門司港を出たら船は落ち葉の様に弄ばれ、今迄<sup>ふなのり</sup>に船乗生活をした事がなかった為か、船酔いを感じ食事が喉を通りませんでした。。

二日間過ぎた気がした頃、船の揺れが収まったので、勇気を出して甲板に出て見たら其処<sup>きーるん</sup>は基隆、雨の港。台湾基隆港でした。

下船して何もわからないので当地の案内人をお願いして、終点高雄までの切符を買い乗車しました。此の世に生を受け、始めて踏み出した外地、まわりの人達の言葉は一言とて解る

訳もなく、四面楚歌、孤独閑を感じ、心に悶<sup>もだ</sup>える自分でした。

待合室で腰を降して居たら、「お兄さん何方へ」と声を掛けて下さる方が居り、

「実は私、日本の静岡県磐田郡田原村から先輩を慕って台湾に、日本の食品会社が合併して作った台湾合同鳳梨株式会社高雄本社に入社したもので、高雄本社に参りたいのですが」と言いました。

「之は奇遇だ。私は日本製糖公社の者で、台中まで戻るところなんです。台中までご一緒ませう。」と。

地獄<sup>ほとけ</sup>に佛とは此の事かと天に昇る気持ちでご一緒を依頼致しました。

其の方の話だと、

「遂最近、阿里山<sup>ありさん</sup>の学校で日曜日に体育祭を開催した時、阿里山の蛮人達が謀反を起し、日本人を皆殺しにすると蛮刀<sup>かざ</sup>を振り翳し乱入して来て、彼方此方<sup>あちこち</sup>からの悲鳴が聞こえ、この世の生き地獄でした。私も此の時は便所の糞甕<sup>くそがめ</sup>に飛び込んで命を拾う事が出来ました」と言う事でした。

私としては「貴重な体験談ありがとうございました」と。警察の通報で掛け付けた蛮人達は全員処刑されたとか。

今現在でも世界のどこかでテロが発生し何百人もの犠牲者が出たとか。

日本の昔話では肉弾三勇士が有名でしたが、最近では二〇一六年の今、此の自爆テロとか抑圧の有る所では反発が有り、為政者達はDHPの根本精神で此の世を渡れば等々。

何時の間にかうとうと眠っていた私を起こして下さる人が

「台中ですよ」と教えてくれました。

私は厚くお礼を言ひ、私の切符を見せ、

「高雄までです。」

と言ひ、台湾人の情に心を打たれました。流石、ブツダの国民だなど、私の将来に対する光明を痛切に快く感じました。

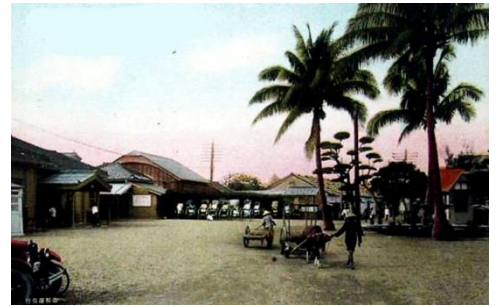
長時間の旅の疲れで夢<sup>ゆめ</sup>現<sup>うつつ</sup>して居たら

「次は終点高雄です。お忘れ物のない様に」とのアナウンスに吾にかえり荷物を再確認して

終着駅を下車し、合同鳳梨株式会社までタクシーを走らせました。

本社に着き、受付に其の主旨を伝えると先方から

「長旅ご苦労様、今日は会社の独身寮に泊まって、明日九時迄に会社して下さい。」と言われました。



(戦前の高雄駅)

珍しい異国台湾の気分を味わおうと、高雄市内の銀座カフェに入りました。其処には海軍の水兵さんが三人居りました。共に故郷を遠く離れた者同士、心が通うのか、お互いに住所氏名を名乗り合うのでした。鹿児島県日置郡市来町大里、三原栄さんでした。

一夜明けて会社に足を運びました。受付から控室に通され、暫くして係の方から

「君は何故此の会社に入社されたのですか」

と聞かれました。私は

「スケールの大きい事。其の第一は製品の原料を作る農場と加工する工場が全島各地に有り、製品販売店も同じ様に有り、此の様なスケールの会社ですから」と答えました。

「解りました。時に君は農学校出身でしたね。此処から一番近い鳳山農場に赴任して下さい。農場には日本語の分かる方が居ります。陳万才という優しい方が君の味方ですから。会社の車で農場までお連れ致しますから、ご自身の荷物を確認して参りませう。」

広い農場には、鳳梨の苗が整然と植えられておりました。事務所では、王さんという温和な日本語の分かる所長が「いらっしやい」と言葉を掛けて下さり、

「私は今度此の社に入社した鈴木と申します。」

と名刺を渡して挨拶しました。続いて、

「初めまして、私が作業現場の監督の陳万才です。」と。其の笑顔や動作が今でも目に浮かんで来ます。

直ぐ独身寮に案内され、旅装を解いていると、手振りの鐘が鳴るので先輩に尋ねると、「夕飯の合図だよ」と、言はれる儘に食堂に行ったら<sup>あや</sup>垂冶という其の女性は流暢な日本語で「夕飯ですよ」と声をかけてくれました。食堂には黄色い相思樹が沢山咲いて居り、爽やかな香

りがして、しかも異国と言うダブルパンチを受け、日本語での「いらっしゃい」という言葉に、此処は何処かと目を疑うのでした。

「美味しかったよ」と亜治さんにお礼を言って寮に戻り横になって休んでいた外は暗くなり、キイキイと聞きなれない音に耳を奪われました。すぐ隣り房の先輩の落合さんに、「彼の音は何の音」と尋ねたら、

彼は、「<sup>やもり</sup>守宮と言はれる益虫で、壁に止まって居て、飛んで来た蚊を舌を長く出して掴んで餌にしているのだよ。」と教えてくれました。実質的にも人間が熱帯地の病気マラリアを媒介する蚊を餌にして生活している守宮こそ、愛おしい友人であり、益虫だと認識を新たにしました。道理で



窓にネットは張って有るが蚊帳は使っていない。キヤキヤの守宮の誘導で夜路に就きました。

手振りの鐘の音に目が覚めた。時計を見たら5時半だ。急いで脚絆を巻き、食堂に行き、亜治の「お早うございます」に又目が覚めました。

朝食後、地下足袋を履き、作業着を着て、陳万才君と一緒に畑の現場に向かいました。そこでの内地では見られない光景に、私は啞然としました。時に纏足婆さん<sup>てんそく</sup>。一人健気に働いている姿に、栄枯盛衰は世の常とは言へ、自分の前に働いておられる彼女は天涯美人で有ったであろう現実、そして私との出会い。私自身目を疑う程でした。

昔中国では足首を小さくして育てれば、亭主に都合が悪くても早く逃げられない様にとの噂ですが、真実は知りません。足が小さいと美人だとも言われていました。

農場では、二十人程の労働者たちが見慣れない鋤を持ち、真黒い布を被り黙々と作業して居ました。私が現場に着いた時から、何か急にざわめく様になりました。その言葉の中に笑い声が混じって居りましたので、陳万才君に何の意味かと尋ねたら、それはカオギナと言う、その言葉の意味は肥えた小豚と言う事だと。思うに私は体重六十キロ余り。素直に頷きました。

任務上、現場の言葉を覚えるのが先決問題で、陳万才君に一句一句尋ね教わるのでした。クカシチム パーツアオとは、深く掘って草の根まで取ってという事でした。

後で聞いた事ですが、昔は此の丘は死人の埋葬地だったとか。時には大きな穴が開き、人

骨が出て来たり、蛇が出て来たり、ハブ（毒蛇）とか。

そんな時労働者達が<sup>ばーぼっあ</sup>八歩蛇と叫んだ。日本語で『八歩蛇』。此の蛇に噛み付かれると人間は八歩歩く内に死ぬ程の猛毒を持つ蛇との事。私自身、国内では常に<sup>まむし</sup>蝮を捕えて、先ず先に毒歯を木の枝で折り取り、毒液を絞り出し、彼らの目の前で蛇の皮を剥ぎ取り、川で洗って居る所も見せました。以後、彼らの口から『カオギナ』の言葉は一度も聞いたことはありませんでした。

古い先短い老人に有った青春の一頁。それは台湾高雄県鳳山農場で勤務した頃の事です。流暢に日本語の話せる陳万才君と一緒に楽しい毎日を送っていた時。それは、隣村から集団で通ってくる作業員の中に、身長<sup>せんち</sup>壹米五拾<sup>せんち</sup>糎程で、気立ての優しい楊さんという細身の女性が居りました。彼女は何故か「これはどうするの」「此の草はどうするの」と私に言葉をかけて来るのです。その目つきや笑顔が「私はあなたが好きです。あなたは・・・？」と訴えかけてくる様に思えてなりませんでした。

「貴方<sup>ラオチャー</sup>の老家（故郷）は」とか、「父母親は」とか、そこで私は「日本で美しい富士山の有る静岡県だよ」と。亦、「台湾の料理は何が好き、果物は何が」と、私は、「台湾の果物でマンゴウ、竜眼、鳳梨、パパイヤ、ドリアン等々あるが、ドリアンはキャラメルのような美味しい味ですが、外側の臭いが悪く、ホテル等は持ち込み禁止で、市場で食べる外ありません。」などと、彼女とは色々な話をしました。

誰かの歌ではありませんが、目を瞑れば<sup>つぶ</sup>瞼<sup>まぶた</sup>に、茶を飲めば湯呑に浮ぶ、異国同志の片思い。どうすればいいのでしょうか。



台湾での生活に漸く慣れたころ、故郷より徴兵検査を受けるようにとの通知を受け、高雄市の西子湾温浴場で検査を受け、乙種合格になりました。<sup>パイナップル畑</sup>

六月ともなると鳳梨（パイナップル）の収穫期。甘酸っぱい香りが南風に乗って来ます。半年の苦勞の賜。盗まれて<sup>しま</sup>終わらない様に、陳万才君と度々夜警に<sup>む</sup>務くのでした。

収穫したパインの根本にあるサツカ苗に既に寄生している貝殻虫を駆除する為、縦横二米位の棚を作り、その中に苗（サツカ）を三百本位入れ、彼の時使ったガスは青酸ガスだったと記憶していますが、天幕（シート）で覆い台の上の青酸ガス缶の栓を抜くのが新監督の役

目とか。少しでも此のガスを吸えば彼の世行きかと命懸け、九拾才を過ぎた今でも心の底から浮かんで来ます。それは、次の春植える苗の準備の為、このように命を懸けた大切な仕事なのです。

パイナップル畑に草が生えて忙しくなり、部落にクリイを募集に行くと、すぐ門先まで急いで来てタバコを新しい箱から取り出し、私がそれを受け取ると、マッチに火を点け、チャフン／＼と所変われば品変わると言うけれど、拾八才の私には驚きでした。

蚊に喰われたらマラリヤに<sup>かか</sup>罹るからと言われ気を付けていました。然し運命の悪戯に弄ばれて、遂にマラリヤに罹り、三十八度の高熱を出し、高雄病院に入院しました。誰に聞いたのか、海軍の三原栄さんが御見舞に来て下さいました。頂いた品をベッド上に置き、二日程して開いて見たら小さな蟻が一杯付いて居りました。熱帯地には思わぬ伏兵が居るもんだと驚きました。

マラリヤ菌は体内に入ると駆除するのに時間がかかるとか。然し新薬キニイネと言う丸薬によって、マラリヤは私の身体から除去する事が出来ました。

農場の仕事も慣れた頃、高雄の本社が台北市へ移転する事になり、仕事に関係の無い私までも移ることになりました。嬉しさに心に幸せを覚えるのでした。

新しい本社は味の素ビル三階で、見晴らしの良い処でした。何故か此の地に来て直ぐ友達が出来、「君の名は」と尋ねると、陳一義と書いて呉れ、お互いに心を許す仲になりました。



(台湾総督府)

此の様に仲良しになったクリスマスの前日、

「鈴木さんは独身寮で一人で休まずに、私の家で楽しいクリスマスパーティを一緒に楽しみませう」と誘って頂き、遂に甘えてその言葉に乗ってしまう私でした。

台湾合同鳳梨株式会社は、昭和十年（一九三五年）に、乱立による加熱競争状態にあったパイナップル缶詰工場を整理統合して設立されました。

台湾のパイナップル缶詰事業は、明治三十五年（一九〇二年）現在の高雄鳳山から始まり、大正末期から昭和に入った頃に産業的に拡大していきました。

終戦直前の頃には、パイナップル缶詰の世界三大供給源の一つとなり、特に軍隊の保存食として重宝されていました。戦後、此の会社は、台湾鳳梨会社に引き継がれております。



(台湾合同鳳梨(株)の缶詰工場)

台北へ移って何カ月か過ぎた頃、此の様な至福の毎日だった私に、遂に来るべきものが来ました。それは歩兵名古屋十三部隊入隊通知でした。兵役は日本人の三大義務の一つです。

帰国の支度をしていた時、友人たちの中から、飛行機の便があるのではないかと勧める声もありました。而し、当時の私の月給が貳拾円前後でしたので、其の資格も余裕もありませんでした。

基隆港<sup>きーるん</sup>を出港して一昼夜過ぎた頃から船内が騒がしくなり、沖縄だ、何島だと、船酔いで食事も摂れない体故、待つは海路の日和かなと……。船の揺れが収まったなあと感じた時、其処は門司港でした。次は高松港、最後は名古屋港でした。

トランクと身一つの体。名駅から東海道本線に乗り袋井駅で下車して、遠州鉄道の見付行きバスが有り、西島のカドヤの前で下車し、二百メートル先の我が家まで歩き、門を潜ると其処には昔の儘の倉庫と牛舎、そして牛も健在でした。

思った通りの母の元気な姿があり、只一言、

「只今」と言っただけで、母の膝に伏すばかりでした。

牛も「モオン」と一言、迎えてくれました。

仏壇に線香を立て、「只今帰りました」

その足でお寺の先祖の墓に花一輪と線香を立て、

「只今帰りました。之から亦名古屋の歩兵十三部隊に行つて参りますから、家族をよろしく」とお願いして家路につきました。

台湾から帰国して二日過ぎた日、愛國婦人會や村の役員の方達に送られ、軍隊への第一歩を踏み出したのでした。その部隊は、名古屋歩兵十三部隊輜重隊<sup>しちよう</sup>でした。

私の入隊した部隊は輓馬隊<sup>ばんば</sup>で、任務は馬舎内の馬糞の片付と敷草の交換でした。馬は人を見る目があるようです。ある日馬が私との手綱を引き離し、私は放馬して終いました。班長

が之を見て、「鈴木二等兵は馬に舐められた。自動車部隊に編入だ。」と言われました。私としても馬は好きではなかったので、安堵の胸を撫でおろしました。

暫くしたある日、当隊は全員満州（現中国東北地方）に移動しました。我々の中隊は北滿勃利<sup>ぼつ</sup>（現中華人民共和国黒竜江省勃利県）でした。愈々此処に、私の三万五千里の軍隊生活の扉が開きました。其処は毎日が身体の鍛え場所であり、又様々な五感を使った人生の訓練場でした。銃を両手で持ち、両膝と両肘<sup>ほふく</sup>を使つての匍匐前進等、此の様な過去が有つてこそ、現在の健康が有るのだと思います。

毎日三度の食事、当番が順番に回つて来て、飯場の号令で一斉に採りに行き、古兵も新兵も同じテーブルでしたので、配飯が終ると、新兵はトロロ汁の様に御飯を流し込む様に済ませ、古兵の食事の済むのを待つて居て、箸を置くのを見て、奪う様に持ち去り洗つてあげる事は、当時の新兵の古兵へのマナアの様な時代でした。



（ 匍匐前進 ）

毎日の演習中での戦車が難しい。上から鉄棒で叩かれて初めて間違いが解る位でした。

我が中隊の任務は糧秣倉庫<sup>りょうまつ</sup>の守衛でした。冬は凍土満州と言われ、一本の杭を立てるにも鍬では齒が立たず、鶴嘴<sup>つるはし</sup>で穴を掘り、一人が杭を立て、掘った土を根元に寄せて上から水を掛ければ、直ぐ凍つて終わりました。

当時勃利には直径二メートル、深さ一メートル程の井戸が有り、常時バケツで汲み上げて使つて居りました。凍土勃利でも、地下二メートル位になると地熱で凍らなかつた様でした。

任務上、常に倉庫の周りを廻つて居た時、いくらかはペチカの上で休むのですが、小野田セメントの空袋の上下の縫い糸を取り、胴巻きともズボンとも思われる身なりで歩いていたのは軍内作業員でしょうか。その姿の余りもの惨<sup>むご</sup>さに七十年過ぎた今でも、目に浮かぶのです。

ある日曜日に、同年兵と二人で勃利の町中を散策していた時、雑貨店の軒先に珍しい光景があるではありませんか。それは横に吊るしてある竿に拾



（ 旧満州 勃利 正直街 ）

匹位の野鳥が首を曲げて吊るしてあるのです。見れば銃で撃たれた傷もありません。店の主人に尋ねたら、「大豆を焼酎に一日漬けて、晴れた日の夕方、この大豆を撒いておき、明日朝早く見に行くと、アルコールに酔って凍死したのを拾って来るだけだよ。而し、縄張りもあり、遠くへも行けず、外気温5℃以下の地方でないとできない事だ。」

凍土満州も五月になれば若草が一面に生え、所々に草丈三十<sup>センチメートル</sup>糶米位に真っ赤な百合の花が咲きます。此の姫百合こそが凍土満州に春の訪れを伝えて呉れるのでした。

夜勤の時等、狼の遠吠えなどウォーン等と聞えた時など、思はず銃を構えるのでした。

日本が戦況不利になり始めた頃、ソ連が一方向的に満ソ不可侵条約を破棄して戦車を先頭に侵入して来ました。満州開拓民は右往左往。当分の食料を持ち、満鉄を利用する者、車の有る者は車で、車のない人は徒歩で南下する人達。死の行軍とは此のことかと、昼夜続く行進で、特に夜間など、乳飲み子に泣かせまいと口と鼻を圧迫して息が出来ず窒息して他界した子供さんが何人も有ったとか。遠い満州まで、お国の為と言われて来たのに、中には故郷の土地を売り払って満州開拓団員として渡満した人など、政府が住居を確保して上げたでしょうか？

日本兵は満鉄を利用して南下しました。昼も夜も我ら兵卒は無蓋貨車で、雨が降れば濡れ、雪が降れば積もる車内でした。

何時間か過ぎ、列車が止まった所は朝鮮半島南端の様子でした。三度の食事とて定まって居る訳もなく、腹が減れば乾パンを食べ、水を飲む。之が常識だったのです。



噂によれば我々は、規格船に乗りバシイ海峡を越えヒリピン迄行くのだとか。我ら兵卒の知る由もなく、放牧された羊の様に、（満州から引き上げる開拓民）南十字星を眺め乍ら、センチメンタルに耽る自分でした。白い光の尾を残して消え行く流星も、<sup>やが</sup>躰ては我が身と心に念ずるのでした。

やがて大海原に出た船はお手玉の様に<sup>もてあそ</sup>ばれ、揺られ流され着いた所は数年前まで住んで居た高雄港ではありませんか。岸壁の倉庫は爆撃で焼け落ち、積んで有ったであろう砂糖

が溶けて薄茶色の泥の様になり、辺り一面を被っていました。数年前までは住み慣れた高雄。懐かしさを一入ひとしお感じるのですでした。

感傷に耽っていた其の時、目の前に一機の戦闘機が墜落して、港の中に沈んで行きました。翼には赤い日の丸が付いて居ました。我々は只「アッ！」と言っただけで意気消沈。何時の間にか集結した輸送船は六隻とか。一個中隊の戦車、自動車、重火器とか、戦闘機具等々満載との事でした。



之から此の船団はバシイ海峡を越えてヒリピン・ルソン島のマニラ港に行くのだとか。此の船団を援護して呉れるであろう護衛艦一（洋上で撃墜される戦闘機）隻もなく、敵のスパイにとって最高の餌食になるのではないかとの予感がしましたが、一兵卒では発言する資格もなく、黙秘の道に行くしかありませんでした。

船の揺れに気付いた時は、バシイ海峡を南に南に、『バシイ海峡春景色』ではありませんが、時折、秋刀魚程の大きさの飛魚が左右に長い羽根を踊らして沈み行く様が愛おしくも思えるのですでした。

バシイ海峡で二、三度大きな振動を感じた事がありましたが、何故と思うだけでした。我々の輸送船は、鉄板一枚外は海。一発食らえば爆下沈と、よく言ったものだと思います。

マニラ港に着いたのは三隻。岸壁には着けられず、待つ間中も港の上空には敵の戦闘機が飛来して、今にでも機上掃射を始めるのではないかと、此の時こそ身の置き所が無いと言うのか、神頼みの心境でした。

残り三隻の輸送船は遂に来ず、戦力の主体となる車や戦車は影も形もありません。彼の時の数回の謎の音は、友船がバシイ海峡で敵の潜水艦による魚雷攻撃に依り、海の藻屑もくずの様に沈められたのでしょうか。矢張り高雄港にスパイが居たのでしょうか。重圧が嵩みつつも、我々兵員だけは、全員銃剣を身に付けて上陸完了しました。

マニラ港に着き、全員上陸はしたけれど、重火器はなく、兵卒だけでは言葉もわからず、解放された狼の群れの様に市民からは遠ざかり、生憎の雨の中、高床式の民家を借りて休んで居たら、ハイエナの様につき纏う敵機の銃撃で燃え上がり、高床から飛び降りて防空壕に

飛び込んだら、其処は民家の地下室だったので、「失礼しました」と外に出て、方向音痴の我々は羅針盤の振り向く儘に、北へ北へと進路を取りました。

ルソン島の昼なお暗いジャングルも、アメリカ枯葉作戦の前に成す術もなく、傾斜地に穴を掘り、シートを垂らし、身を隠すのでした。其の時、台湾の公民兵が大きな声で彼方に一匹、そちらに一匹と、今迄日本軍に所属して居ったが日本軍戦況不利となり寝返りしたなど直感したのは私だけでした。数年前まで台湾に住んで居り、直接彼らと話をした経験から感じるのです。

追い打ちと言うか泣きつ面に蜂。空には観測機が飛来して身動き出来ず、飛び去るのを待つしか有りませんでした。

ハイエナを気にしつつ前進して居ると、遙か前方に林が見えるではありませんか。藁をも掴む思いで林の中に入る事が出来、せんざんこう『仙山甲』ではないが、お互い自分だけが入る穴掘りが始まりました。



(ジャングルでの戦闘)

此の谷間に来る途中、長さ壺米も有りそうな迫撃砲の不発弾が転がって居り、不気味な風気が横切るのです。

そんな時、又してもハイエナが空からの御来臨の様子。見付ければあめあられ雨霰の砲弾の見舞いを喰うのが関の山。彼の日から数日後、彼の観測機が飛来し、上空を旋回して何か喋っているではありませんか。

耳を澄まして聞くと、この時の放送は違っていました。それは、「日本の兵隊さん、戦争は終わりましたので、山から下りて武装解除してください」と。

しかし、誰もこの言葉を信ずる人はおりませんでした。

一日過ぎて、又同じ言葉で放送して来ました。何故か空気が静まる様に感じました。戦友達も指定された所に向かいました。案の定、背の高いアメリカ人が、何も持たず三人居り、我らの持っていた歩兵銃と剣は取り揚げられ、静かに武装解除が終わりました。

我らを迎えに来て呉れたのは、長さ五、六メートルもあろうと思われる大きなトレーラーではないですか。当時、日本では貨車と言えばオート三輪車位しかなく、此のトレーラーを見て、戦力の差を実感しました。

敵を知り己を知ってこそ、我に勝ち目有りとか、国家の指導者は考慮して欲しいのです。何時も苦しみ泣くのは国民であることを！

我々が送り届けられた所は、マニラ郊外の広い野原で、大きな天幕がいくつも張っており、其の中に折り畳み式一人ベッドが何百となく置いて有りました。この日から我らPW（prisoner of war・捕虜）の生活の一步が始まるのでした。鬼が出るか蛇が出るか、後日のお楽しみ。

ベッド間には幅はなく、お互い故郷の特産品の紹介が始まり、雀の学校開演と言いだす所ですが、懇談会が終わったころには、彼方此方から鼾の競演会が始まり、白けた一時でした。そんな時、紙<sup>こより</sup>燃でも鼻の中に入れてたい悪戯心が湧き出るのを如何ともし難く、流れ行く時間を送るのでした。

我らPWへの供与は、朝晩茶碗一杯の飯だけ。それも、ドラム缶の中から杓<sup>しゃもじ</sup>文字で掬<sup>すく</sup>って呉れるのでした。副食品等一品もなく、貧血で立ち眩みする人が多く出ました。そんな彼<sup>あ</sup>る日、数名のPW（捕虜）が天幕の前に直立不動の姿勢で、白紙に『私は今回炊事場でポテトを盗みに入って捕まり、一日絶食です。』と書かれ立たされていまして。何故か兵卒の中には居りませんでした。御互い空腹も限界を超えており、同情の余地あれど我慢の限界を越えて居りました。

そんな頃、『キャン ユウ スピイク イングリッシュ』の募集が有り、少し自信があったので応募しました。応募は六名有り、彼らのジープに乗って着いた所はキッチンルームでした。それからと言うものは、手真似足真似、必死の毎日でした。カウンターで配食した残りは、我等六名が頂くのでした。昨日までの空腹感は何処へやら、芸は身を助けるとは此の事かと痛感するのでした。

特に私に気を配って下さるトムと云う兵隊さんが、彼る日「スズキ ユー カムオン」と呼ぶので走って行くと、「私は今からシャワーを浴びたいから、私の体を洗ってくれないか」と云いました。

私は即OK。下着一枚でシャワー場へ行き、頭<sup>あたま</sup>の天辺から足の爪先迄、綺麗に洗い流してあげるのでした。シャワーが終ると、トムはサンキューと言って自分の天幕に帰って行きま

した。去り行くトムの後姿を見て、昨日の敵は今日の友、込み上げて来る物をどうする事も出来ませんでした。

そんな彼る日、私は風邪を引き、三十八度の熱が出ました。誰に聞いたか、トムが風邪薬を持って来て、

「之を飲んで私のベッドで休んでいなさい」と言って自身のベッドも提供して下さいました。



(ヒリピンの捕虜収容所)

トムと私の立場は天と地ほどもありましたが、トムの此の温かい気持ちの為か、一日過ぎたら熱も降り、平常になり、再び炊事場で働く事が出来る様になりました。之も<sup>ひとえ</sup>偏にトムの熱い友情の賜であり、他の何物も勝る物は有りませんでした。

一般のPWは、広野の草取りとか整地などでしたが、私は汗を掻く程の仕事では有りませんでした。七十年過ぎた今でも、トムの友情は消えることはありません。

私達六名の仕事は、彼らから言われるままにメニューを作り、カウンターで配食する仕事でした。残品があれば、私達が食べる事が出来ましたし、食べ切れなければ空き缶に入れて、班に持ち帰って友人達に分配しました。内にはキッチンの仕事を交替せよと言う人も居りましたが、

「ノンスピーチではねえ」と言って断りました。

何ヶ月過ぎた頃、PWの生活に期限が有ったのか、帰還の準備をして下さいとの話があり、皆騒ぎ始めるのでした。戦友の別れとは、兄弟の別れの様に深刻なんです。抱き合ったり、住所を知らせ合ったり、今世の別れと思わせる深刻な風情でしたが、死線を<sup>さまよ</sup>彷徨った経験の無い人には解りません。太陽が輪を描き乍ら沈む姿を見て、思わず今日一日ご苦労様でしたと手を合わせるのでした。

二、三ヶ月ほど過ぎた日に、例のトレーラーが我等を迎えに来てくれました。此の度は小石を投げられる事もなく、マニラ港へ無事に着きました。私達六名には各々十九ドル二十セント渡されました。之は期間中の、日本で言う日當でしょうか。流石アメリカと心に刻むのでした。

乗船した船の中は<sup>ごさ</sup>蔭が敷いて有り、薄茶色の毛布が何枚か有りました。私としては、亦

苦しい船旅が始まるのだと思うと、国へ帰る嬉しさと船酔いの苦しさが入りまじります。万感胸に迫り、身の措く場所も知らず。

昔軍隊の一兵卒の頃、戦陣訓の中で『生きて<sup>りよしゆう</sup>虜囚の辱を受けず、死して護国の神となれ』と教えられましたが、日本は敗戦になったが、PW生活の中で、恥を一度たりとも搔く事は有りませんでしたよ。開戦時の指導部が敵を見る目がなかった為に、靖国神社の英霊に済まない事をしたのではなかったかと、心に念ずる今の私の心中です。オート三輪車とトレーラーの比では有りませんね。

昔、東京大学の講堂に学生が立て籠<sup>こも</sup>り、日米安保条約反対を叫んで大きなニュースになった時代が有りましたが、勝てば官軍、負ければ賊軍とか。言葉とは時代と共に変わるのですかね。我らを乗せた船は、魔のバシイ海峡を航海するのだと。然しこの時、海の藻屑<sup>もくず</sup>となった何百人の戦友たちの御霊<sup>みたま</sup>を癒<sup>いや</sup>して上げるべき一輪の花もなく、只手を合わせて安らかにと念ずる外に術はありませんでした。驪<sup>やが</sup>て私達の船は台湾を右前方に見乍ら北進するのでした。時が過ぎる程に故郷への思いが重なり、各地区の土産品コレクションに盛り上がるのでした。



(復員輸送船)

一夜明けて今度は沖縄だと、甲板は急に賑わって来ました。何年かぶりの再会ですから、私自身、母親の健康が心配でした。門司港で下船する人、高松港で下船する人等、様々でした。

最終港名古屋で下船する人達が一番多く、私はその中の一員でした。PWの帰国者の皆さんは此方へと案内され、特別な室に入れられ、一列に並び、頭の上や首の後から白い粉を振り掛けられました。次に温浴場へ行き、総てを洗い流した様な気がしました。外国からの病虫害を国内に侵入させない為で、当然のことだと思いました。

後程聞いた話ですが、あの白い粉はDDTと言う殺虫剤だとか。特に南方からの帰国者、我々PWには色々な害虫が体に付いて居るからとか。何故と言う術もなくなされるままに……。

名古屋駅から東海道線に乗った時、昇降口から乗る人より汽車の窓から飛び乗る人が多く、戦災で焼野原になった駅前を見れば、自然と<sup>うなず</sup>頷けるのでした。

りっすい  
立錐の余地のない車内で、

「兵隊さん、永い間御苦勞様でしたね。どうぞ此の席へ」と、何故か親切に座席を譲り渡してくれる方が有りましたので、旅の疲れも有り甘受しました。荒ぶ此の世、一面識もないのに何故と思った次の瞬間、

「兵隊さん、アメリカドルを持っていませんか」と何故私の懐の内までわかるのかと魔法に掛けられた思いでした。

「ハイ」と答えました。次に彼は、

「そのアメリカドルは故郷に持ち帰っても使用できません。紙屑同然だから」と。



(終戦直後の満員列車)

私の服の背中にPWのマークが付いて居り、靴もアメリカ製だったから声をかけられたのだと思います。其の十九ドル二十セントと交換したのが、パイ缶六キンでした。此のパイ缶の味は特別でした。

浜松駅で途中下車して、兄貴の所まで行きました。駅から東に進み、ガードを潜って角を東に進み、突き当たりが向宿の兄貴の家でした。時に時間は夜十時過ぎ。玄関の鍵が掛かっているのは当然。勝手知っている他人の家、裏口に回り、雨戸を叩くと中から

「どなたですか」と兄嫁の久子さんの声でした。

「武だよ。夜遅く済みません。」と言うと、雨戸を開けて中に通して呉れました。

私は帰国船の都合で名古屋港に着いた後の事を色々申し上げたら、やさしい兄嫁はすぐ熱いお茶を出して下さり、

「今夜は遅いから明日ゆっくり話ませう」

と床に就きました。

一夜明けて朝。暖かい朝御飯と美味しい味噌汁で、お代わり迄頂き、タクシーを呼び浜松駅まで送って頂きました。

上り列車に乗り、袋井駅で下車して、故郷への足が進むのでした。この間私として一度も切符を買った記憶はなく、マニラの乗船から故郷迄のフリーパス。国家としての配慮が当然だと思いました。見付行きのバスに乗り、西島のカドヤ前で降り、わが家へと足を運んだ其

処には、夢に浮んだ茅葺<sup>かやぶき</sup>の屋根に倉庫と牛舎と牛も。何だか牛に「モー」とお帰りを言われた気がしました。

上り端で「只今」と言うと、母上も「お帰り」の一言。

手と手を握った母の目に、溢れる涙が浮かんで居たのを、見逃す事はありませんでした。愛國婦人會其他大勢の人達に見送られてから何年。母上の健在が何よりでした。

座敷を通り、仏壇に線香を立て、「只今帰りました。」と報告し、其の足でお寺に行き、我が家の墓に一枝の花と線香を立て、「常に家族をお守り下さいまして有難う御座いました。此の度は、私も無事戦場から帰還する事が出来ました。今後共宜敷くお願い致します。」

『居候、居て悪し置いて悪し』で私としても居るべき人間でない以上、長居は・・・と思っていた矢先、彼<sup>あ</sup>る果物屋の主人に勧められて、或る雑貨屋を紹介されました。前にも申し上げました通りの人間。宜しくと・・・。

結婚して初めて聞いた事でしたが、長男は学校内で柔道の練習中、頭を強く打ち倒れ方が悪く死亡して、次男は私と同年で静岡部隊で南方作戦で戦死したとか。今私が両親の気持ちを考えると、商売に一心不乱、我が人生茨道の第三段の始まりでしょうか？

私の嫁は三女でした。戦争で食料も十分に生産出来ず、輸入すらままならず、お米も配給だったので、馬鈴薯なども小さく切り、お米の中に入れ、駄ふやしにしました。

都会の人達は、絹、銘仙などで出来ていた着物などを持って来て、農家でお米と交換して貰うのでした。後世に言う稼ぎ屋と言って汽車は農家に行き来する人達で常に満員だったので。亦当時の警察は取り締まりと言う名目で稼ぎ屋の米の目方を調べて、一人の持分に制限が有ったのか、取り上げられた人も有った様でした。

私たちは二男一女に恵まれました。長女が生まれ一年過ぎた頃、病気に罹りました。其の時女房がおかしい信仰に走り、手を翳<sup>かざ</sup>すだけで病気が治るからと、然し好ましい状態にならないので近くの医者に診断を受けたところ、之はもう手遅れですと言われ、折角恵まれた女子も私の立場上強く言えず、涙を流すのでした。

次男は祖母の遺伝でしょうか。小児喘息に罹り、心の休む時ありませんでした。此の様に悩んでいた時、臨家に公運堂と名乗る鍼灸師が居られ、子供六人を立派に成長させたこと

を知り、高等学校卒業後、大阪の鍼灸柔整専門学校を卒業させ、現在、磐田市富士見町3-1 1-1で戸塚鍼灸大学堂と云う名で営業して居ります。

細腕一本で我々九十歳の坂を越えた両親に、至福の毎日を送らせて呉れる息子への恩返しが出来ればと、心に念ずる次第です。

敗戦後七十年も過ぎた今でも、マニラでのPW生活で特に世話になった、当時陸軍伍長だった、アメリカのニューヨークに住んで居られるトム・オーレンチ (Mr. Tom Olench) 戦友の写真が有りましたら、一枚で結構です。常に胸に抱き、彼の世とやら迄行き度いのですから・・・。



(戸塚鍼灸大学堂)

## いじ 苛めに就いて

最近社会の発展とテレビの影響で苛めも多種多様。私自身小学校通学当時、冬も夏も鞆を肩に掛け、お尻にパタパタンと反動をつけて通学しました。其の時代の小学校は村の中心で、田圃路を五〇〇メートルは有りました。

此の時代は今の様に秋の収穫は稲を一株ずつ鎌で刈り取り『はず』掛をして乾燥させ、脱穀も各家庭の日当たりの良い所に蓆を敷き、太陽に当て充分乾燥させ、粃を白に掛け、初めて玄米になります。

前座が永くなりましたが、冬になると此の稲株が白く凍っており、餓鬼大将が私に「その凍った稲株の上を歩いてみよ」と。気の小さい私は断ることも出来ず、心で泣いて凍った稲株の上を歩きました。

『積善の家に余栄有り、積悪の家に災禍有り』『艱難爾を玉にする』と有ります。

心で泣いた頃の事を思うと、孝行息子の世話で至極の毎日です。苛めも万物の靈長。あるまじき事。お互い手をつなぎ明日に向かって頑張らうね。

## 短 歌

己家は、野鳥ほほえ微笑む 山茶花さざんかの宿

棒先に 輪切り蜜柑を 釘で止め 野鳥鑑賞 窓際で出来

来る鳥は 目白めじろうぐいすせきれい鶯 鶺鴒くら 朝昼晩と 袋まで喰う

午後の四時 噂をすれば影とやら 百舌もずが又来て 野鳥達を追う

毛細根からすくわ 鴉 喰えて何処に行く やがやが 鶺鴒ひな てカアカア 雛もとの許

猫ジャラシ 種子を拾うか雀達 朝六羽来 晩も又六

日が西に 輪を描きつつ沈み行く 野鳥達迄 其の影もなく

片思い 異国同志の恋文は 行きつ戻りつ 其の影も消え